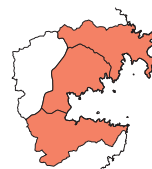


はるかな距離を越えて 翌朝から始まった救助活動



▲大津波から一夜が明けた志津川地区で生存者を搜索する京都市消防局の緊急消防援助隊

写真提供 京都市消防局総務課

南三陸町の沿岸部は大津波で何もかも破壊された。昇ってきた太陽の光に照らし出された無残に変わり果てた町の光景。住民たちにとって、それはまるで見知らぬ土地のようだった。

翌朝明るくなった頃、消防隊のユニフォームに身を包んで生存者を搜索する一団が、瓦礫をかき分けていた。県内の消防隊、そして京都市などのはるか遠方から駆けつけた緊急消防援助隊である。地震でひびや段差ができた危険な道のりを夜通しひた走って南三陸町に入り、大津波警報が発出される中、瓦礫に埋もれた生存者を搜索していた。

自らも救助に向かった町役場職員は目を疑った。「1,000 kmの距離を寝ずに駆け付けてくれたのか」涙があふれた。

彼らは長距離の悪路を移動した疲れを見せることもなく、危険な状況下で精力的に生存者搜索と救助活動を続けた。

国内の消防援助隊は、京都府、鳥取県、兵庫県、秋田県を含む4府県から508隊、1,939人が南三陸町に派遣され、海外からの救助隊も続々と到着して行方不明者の搜索活動が続けられた。